

アフリカ現代史I

第3回 スワヒリ世界の形成

スワヒリ文明とは

- スワヒリ: アラビア語で海岸を意味するサーヒルの複数形、サワーヒルに由来
- 現在のソマリア南部からモザンビークの北部に至るベルト状の海岸地域
- インド洋を舞台にアラビア、ペルシア、インドと交易関係
モンスーンと海流を利用して帆船が西アジア、南アジアから来ている
- 1C~2C 先住民のコイサン系狩猟民と南エチオピアから南下してきた南クシ系農耕牧畜民がともに生活
- 5C頃にバントゥー系農耕民が移住
- アラブ人やペルシア人商人との通婚で混血化が進展
- 現地社会と外来の商人との交渉過程で文化変容→スワヒリ語、スワヒリ文化の形成 12C以降に開花

スワヒリ社会の起源や形成期の担い手に関する問題 2つの学説

外因説: アラビア半島、ペルシア湾岸から移民が沿岸部に住み、アフリカ人との混血である彼(女)らの子孫がスワヒリ社会の担い手

- 根拠 スワヒリ語にアラビア語の語彙が豊富
- 19Cに唱えられ、「定説」に

内因説: 担い手は現地のバントゥー系住民

- 現地社会の基層文化の上に商人らとの交渉を通じて、発展し、イスラームを受容
- 最近はこの説を支持する議論が増加

木材、鉄
金属、銀
リンネル
毛織物
ワイン
石けん
奴隸

毛皮
奴隸

コンスタンティノープル アンティオキア
ダマスカス

貴金属
紙
ガラス

7世紀

ス

サマルカンド

8世紀

長安

—杭州

泉州

一 廣州

太平洋

7

樟腦

香辛料

香辛料
宝石
象牙

香辛料
綿布
寶石
染料
砂糖

マスクカット

絨毯

香水

絹織物
絹

亞麻織物

カイロ

チュニス

タンジール

トンブクウ

モガディシュ

金
象牙
奴隸

- マリンディ
- モンバサ

ソファーラ

貿易路

主要取引品

製糸法の伝播

数字はおもな年代

1 インド洋世界

- インド洋世界
- インド洋 世界の全海水の5分の1
- 最も人口の多いアジア大陸と文明圏に囲まれる
- 西インド洋に共通するシステム
- 16C(ポルトガル進出)以前 交易はカンベイ起点、アデン、マラッカの伸びる
- カンベイはカリカットと対向:カリカットはペルシャ、カンベイ、コロマンデル、セイロン、モルジブの間で交易を展開する拠点

2 インド洋交易の発展

西インド洋の航海 モンスーンを利用

- 11～3月 南西風（インド洋→アフリカ）
- 5～9月 北東のペルシャ湾
- 東アフリカ沿岸部 東南アジア、インド洋西海域、アラビア半島から交易人が集う
- マダガスカル島

エジプト系ギリシャ人『エリュトリアン海航海記』(1C)

- 東アフリカ＝アザニアへ小麦、鉄製の道具、武器、綿織物提供し、ココナツ油、象牙、サイの角と交換
- アザニア人＝漁民
- 有力な首長たち 商業を保護し、交易都市を統治
- 米、バナナなど
- 海岸部に多くの都市が成長→内陸部の商人と外来の商人との間で仲介市場の役割
- アラブ人など 永住する人も増える

- 1000年頃 海岸部の都市：「サンジ」の土地とよばれ、規模が多くなる、富の蓄積も進む
- ペルシャ、アラビア、インドから商人が訪問
- バグダード（アッバース朝の首都に） 海洋貿易の結節点
- アラブ人の存在 イスラーム世界との交易関係と政治関係を促進

アラブ人 長期定住→直接取引

- アフリカ人との通婚
- ラム、キルワ、コモロ、ザンジバルなどの都市が発展

3 スワヒリ文化圏の成立

- 『エリュトゥラー海案内記』 BC1 エジプト人商人が記したギリシア語文献 エリュトゥラーとは紅海のあたりをさす（当時はインド洋、ペルシャ湾、紅海を含める）
- 東アフリカはアザニアとよばれていて沿岸にラプタという港町 「体格のすこぶる偉大な海賊ども」とアラビア半島のムーザという町のアラブ商人との間で交易や通婚が行われていたという記述あり
- 「体格のすこぶる偉大な海賊ども」とは誰か？
- 3つの見解：クシ系言語を話す人々、土着の終了採集民、西方や南方から移住してきたバントゥ系言語を話す人々

考古学的発掘による分析

- クシンバの分析 3期に分類

第1期(BC1～4C頃)

沿岸部 製鉄技術、雑穀を耕作、土器の製造を行う
バントゥ系言語又はクシ系言語を話す人々が集落を
形成

第2期(4～10C)

- * 地場産の土器が多い
- * アラブ人・ペルシア人が現地社会に影響をもたらす形で移民している形跡なし
- * 生活レベル 地元の資源を使用した自給経済
- * 9C以降 ササン朝や中国製の陶磁器など出土
 - ☞ 地域交易に進展あり
- * 10Cまでの東アフリカ沿岸部は基本的にアフリカ的環境、自給経済（インド洋交易は既存の社会構造に大きな変化をもたらさずほど展開せず）

第3期(10～13C)

10～11Cの地層: 大量の鉄の鉱滓(こうさい)や地場産の土器が出土

輸入品も急増

- 12C末 石造りの家屋が一般的に

13Cのキルワ、マンダ、モガディシュ等の港湾都市の遺跡

- イスラーム様式の壺、中国製の陶磁器、内陸部で産出する水晶あり
- 紡績と織物生産の存在が確認
- 石造りのモスクの遺構

中国製の皿をはめこんだ中塔墓

- 沿岸部土着の様式にインド洋交易をとおして伝えられた物質文化の融合



3 スワヒリ都市国家の興亡

10C末 スワヒリ社会形成へ

- キルワ、モガディシュ、ソファアラ、モンバサ 交易都市として発展 都市経済はインド洋交易に依存

10C～11C インド洋交易成長

- エジプト、ヨーロッパにおけるアフリカ産の金と象牙の需要

最も成功を収めた都市

- アフリカ大陸内陸部の南部の交易を支配
- ジンバブウェ高地周辺やリンポポ溪谷から金を獲得

キルワの繁栄

キルワ(・キシワニ) キルワ島の都市国家

- 12C末にジンバブウェの産金地域と海岸のスーファアラを結ぶ長距離航路を支配
- 重要な交易都市として発展、
- この時代の王朝を「
イブン・バットウータ」と現地の人々とよんでいる
- 1331年に東アフリカ訪問
- 『大旅行記』でキルワ(文中ではクルワー)に言及
- 『キルワ年代記』 1520年頃に書かれたと推察される9C以降(イスラーム暦3年)以降の王朝史

約40の大小の都市国家

- * 各都市の有力者 アラブ人あるいはペルシャ人の子孫であると名乗ることを誇り、イスラーム諸王朝との関係を引き合いにだす

- * 諸都市間の関係 交易では競合だけど、概ね平和的關係

- * 一般的には政治的自立→14C末～15C初 キルワのスルタンが多くの小都市を支配していた時期有

- * 内陸部のアフリカ人諸国との関係を維持 基本的な関心は交易

金、象牙、毛皮↔織物、ビーズ、磁器など

都市国家と内陸部

- 一般的には、沿岸都市と内陸の関係は敵対的ではなく、
- ただし、商業上の利害
- 海外の都市の富裕な商人や有力者 商品、家畜、奴隷を求めて内陸部に組織的に略奪
- 14C初 キルワのスルタン 戦利品を求め、内陸部で略奪を行ったことにより悪名高い

スワヒリの文化と社会

何をもって「スワヒリ文化」とするか？

スワヒリ語(Kiswahili)

- 東アフリカで最も多く使用されるリンガフランカ(広域共通語)
- バンツー系の言語、アラビア語の語彙も多い

イスラーム

- 平和裏に広がる、人々のアイデンティティを規定、

建築

- サンゴ礁からできているブロックを積み上げた長方形の建物
- 内部の装飾 アーチ型天井、丸屋根をペルシャや中国の磁気で装飾

スワヒリ社会 3つの階級に階層化

1) 最下層 奴隷

- 家事使用人又は工場労働者(ガラスや綿織物の生産)

2) 自由なアフリカ人 ペルシャやアラビア王朝とのつながりを欠く

- スワヒリ語を使用、イスラーム
- 多様な職業 交易もしくは生産に従事(職人、手工業者、行政官、事務員)

3) 最上層

- スワヒリ語、アラビア語を使用
- ペルシャやアラビアを先祖に持ち、イスラーム
- 支配者の家族、商人、イスラーム説教師、外交官など
- 都市の支配者 全ての商品に最高50%の輸出入税

4 スワヒリ文化の終焉

- 1498年 ヴァスコ・ダ・ガマ率いるポルトガル船団来航
- 南回りのインド洋ルートを開発：東地中海や北アフリカの強力なイスラームの競争相手を避けるため
- スワヒリ諸都市を発見→繁栄した都市国家と交易を支配することを決意
- 重装備して侵入

- スワヒリ諸都市国家 マリディを除き、ポルトガルの要求を拒否
- ザンジバル 1503
- キルワ 1502に一度朝貢を受け入れるが、拒否→
- モンバサ ポルトガルに抵抗→1505 略奪・放火され、壊滅的打撃→1593～95 ポルトガルによるインド洋交易支配のためフォート・ジーザスを建設

ポルトガルがスワヒリ諸都市を支配することに成功したのは？

ポルトガルの支配が継続しなかったのは？

①ポルトガル側の要因

- 脆弱で無能で無秩序な植民地システム
- 官僚の決断力の欠如
- 厳しい気候

②スワヒリ諸都市側からみれば

- キリスト教徒への不信感、価値観の違い、言語の壁

👉ポルトガルを駆逐してくれたオマーンの支配を受け入れる オマーン帝国

主な参考文献

- 川田編『アフリカ史』山川出版、第2章
- 宮本・松田『新書 アフリカ史』講談社現代新書、第8章